

《論 文》

価値の量的表現論

Expressing Value Quantitatively: The Basis of the Value-Form

江 原 慶

概 要

価値形態論は、日本のマルクス経済学が世界に誇るべき研究蓄積を持つとともに、マルクス経済学原理論の体系において根幹に位置する領域である。戦後日本において大きな影響力を持った宇野弘蔵の価値形態論は、不確定な市場を理論化するための重要な起点となっていたが、現代的な資産市場の動態を前に、その説明力を失いつつある。本稿ではその不十分さを直視し、価値形態論の現代的意義を再構築すべく、宇野が批判対象としていた『資本論』のテキストに戻り、再批判を試みる。その際、戦後日本の最大級の論争であった宇野と久留間鯨造の間の価値形態論争を振り返り、価値形態の量的側面を取り去り質的側面に焦点を絞る質量二分法的方法の限界を確認する。その上で、宇野の価値形態論のロジックから、ある商品の価値を別の商品と比較する表現を、価値形態の基礎として取り出す。商品所有者は、ある商品を欲しいと思ったその瞬間に、その商品を手に入れるのに対して自らの手許の資産が足りるかどうかという、価値に関する量的比較を初源的に遂行している。市場とは、単なる商品交換ではなく、こうした比較表現を等置表現へと固めていく量的関係が結ばれていく場なのである。

キーワード：マルクス経済学、価値形態、価値表現、質量二分法、市場

はじめに

日本のマルクス経済学は世界的に見てかなりユニークな進化を遂げている。中でも『資本論』第1巻 (Marx [1962]) 冒頭の価値形態論は、日本ではいち早く第二次世界大戦以前より着目されていたようである<sup>1)</sup>。そこで育まれた蓄は、戦後に学問の自由が保証され、それまで抑圧されていた『資本論』研究が興隆してくるとともに、開花することになる。欧米のマルクス価値論研究が、ベーム＝バヴェルクによる批判に代表されるような、投下労働価値説の当否をめぐる論争をその基本線としたのに対し、日本で価値論と言えば、商品価値がどのように価格として現象するかを論じる、価値形態論が外せないのは、こうした研究の土壌に根ざしている。もちろん日本でも定量的な労働価値説の論証や、それをベースとした価格理論の研究は連綿と続けられてきたし、価値形態論も、労働価値説と無関係に論じられてきたわけでは全くない。

しかし、マルクス経済学において労働価値説を論じるにあたって、価値形態論が不可分の領域として考えられ、しかもそれが経済学的な重要性を持つ大問題として、大学の経済学部で議論されてきたのは、特殊日本的な研究状況であったと言ってよい。

こうした特異性を持つ日本の価値形態論研究において、更に特殊な立ち位置にあるのが、宇野弘蔵によるマルクス価値形態論批判であった。そのコアとなっているアイデアが、価値形態論への商品所有者と、彼／彼女が商品の使用価値に対して抱く欲望の導入である。すなわち、相対的価値形態に立つ商品リンネルは誰かの所有下にあり、「20ヤールのリンネルは上衣1着に値する」というようにリンネルの価値が表現されるのは、リンネル所有者が等価形態にある上衣1着を欲しているからだ、と説明されるべきとしたのである。こうした商品所有者の欲望が価値形態の成立根拠として明示されなければ、価値形態の両側の商品には等しい労働量が投下されているから両商品は等置されており、それゆえに価値形態の両辺は対称的に入れ替えてもよいという理解の余地を残す。それでは、市場が対称的な物々交換に止まることなく、直接的交換可能性が貨幣という特殊な商品に一元化され、その他の商品から非対称的に分離することをなぜ必然とするのかが、不十分にしか理解されない。宇野は大略このように、商品所有者の存在をあくまで伏せて議論を進める、『資本論』の欠を指弾したのである。

宇野の価値形態論批判は、貨幣の価値尺度機能についての『資本論』批判にも直接通じている。『資本論』第1巻第3章において、貨幣の第一の機能として説かれる価値尺度としては、「貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つ」(Marx [1962] S.111)とされ、触知可能で、手渡されうるものとして実在する必要はないとされていた。これに対し宇野は、そのような観念的な貨幣では、価値を“何々円”という価格として表示することはできても、測ることはできないという独自の問題を突きつけた。そして、前者の課題は既に価値形態論で説明済みであり、価値の測定方法という後者の問題こそ、価値尺度論に固有の課題だと見定めた。価値形態論で最終的に等価形態におかれる貨幣は、購買に際して実物として出動し、相対的価値形態の商品の価値を実現することでその価値を「尺度する」と主張したのである。それに加えて宇野は、様々な主体が貨幣を用いて繰り返しある商品を購入していく中で、その商品の価格が訂正されてゆき、そうした価格の変動のうちに価値が測られることこそ、長さや重さの測り方とは異なる、商品経済的に特殊な尺度のあり方だと論定した。この独自の価値尺度論によって、販売と購買が分離した市場、そしてそこでの商品の「命がけの飛躍」(Marx [1962] S.120)がマルクス価値論に鮮烈に刻み込まれることになる。素朴な投下労働価値説をそのまま価格関係に適用すると、ややもすると等しい労働量が前もって投下されていさえすれば、2つの商品の間で何の障害もなくスムーズに売買が成り立つような、平板な交換の場として市場が描かれることになってしまう。それに対して宇野は、貨幣が実在する市場においては売買に不確定性が伴い、価格の上下運動を不可避的に生じさせることを重視する。それによって、市場の不確定的な変動性を理論の中軸に織り込んだ価値論の展開に、先鞭がつけられたのである。

市場の不確定性が、現代経済の問題を考えるにあたって重要な論点となることには、今な

お多くの同意が得られるところであろう。しかし現代資本主義における市場の不確定性や不安定性の中身は、宇野が『資本論』批判を通してマルクス価値論に実装したそれとは、根本的に違ってきてしまっているように思える。まず、市場的な取引が執り行われる領域の急速な拡大によって、現代資本主義の市場で売買される商品の一部が、投下労働価値説が長らく想定していた、工業製品を中心とした商品像から大きく離れつつある。「産業空洞化」という言葉すらもはや古びて聞こえるほどに製造業が遠い存在となってしまった、先進資本主義国の都市に住む我々が目にする労働の多くは、広い意味でのサービス労働であり、そのアウトプットもしばしば実物的なモノではない。実物的なモノを買う場合ですら、何におカネを払っているかと問われれば、モノそのものというより、そのモノが提供される過程だったり、それを消費する環境に対してなのだ、と答えたくるときもある。こうした状況下で、労働価値説の積極的意義を強調する論者の多くは、一見成り立っていないように見える労働価値説が実は別の形で貫徹している、という、一種の暴露型の論法を使っている<sup>2)</sup>。それらを旧然とした労働価値説と同一視し、価値形態論における労働実体と形態の切り分けだけを宇野とともに再論してみても、かつてのようなインパクトは得られない。

より重要なのは、価格の変動のあり方自体が変わっているということである。宇野の価値尺度論にいわゆる「繰り返しの購買」で想定されていた価格の動きは、その商品が購買されることで起きるものである。しかし現代資本主義でしばしば問題になる、資産性の強い商品の価格変動は、必ずしもその商品についての売買取引の締結を直接的なきっかけとしてはいない。ある商品の価格の変化が、種々の資産商品間での相対評価を幾重にも媒介としながら伝播してゆき、他の商品の価格変動を帰結するということがある。その商品だけ見れば、購買によって評価額が動かされているというより、むしろ評価額の変化が先行し、それにつられて購買がなされるといった方が適切であるような現象が、特に資産市場では広く観察されるわけである。そうした価格変動は、不確定だという点では似ていても、「繰り返しの購買」に伴う変動とはやはり違う。購買に対して必ずしも受動的ではない、商品に対する価値評価の自律性が生み出す市場の不確実性がそれ自体として取り出されなければならないのである。そのような現象が広がる現代資本主義においては、宇野がマルクス価値論に見出した市場像を想起させる範囲は狭まり、その直感的な説明力もかなり毀損されてしまったと言わねばならない。

一般論として、理論と現実是一对一で対応するものではない。しかし現実が理論からますます離れていくように見えるとき、それがなぜなのかを考えるのに、理論が何の役にも立たないのであれば、理論の存在意義はない。宇野が作り上げた、市場理論としてのマルクス価値論は、やはり再構築される必要がある。市場の不確定性を分析する基礎理論としての宇野の価値形態論の積極面を引き継ぎつつ、それを批判的に再検討していくべき段階にきているのである。本稿では、その課題にあたって、『資本論』の価値形態論に立ち戻る。宇野の価値形態論の原点に立ち返り、再批判を試みることで、現代の市場現象にも通底する基層を洞察できるような、マルクス価値形態論の再構築を図る。

## 1 価値形態論の問題設定

『資本論』第1巻第1章第3節「価値形態または交換価値」は、以下のように述べて、価値形態の分析を導入する。

商品の価値対象性は、どうにもつかまえようのわからないしろものだということによって、マダム・クイックリとは違っている。商品体の感覚的に粗雑な対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材ははいっていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえようがないのである。とはいえ、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な統一体の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粹に社会的であるということをおぼえておけば、価値対象性は社会的な関係のうちにはしか現れえないということもまたおのずから明らかである。我々も、実際、諸商品の交換価値または交換比率から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、我々は再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。(Marx [1962] S.62)

この文章の後段にある「諸商品の交換価値または交換比率から出発して、そこに隠されている価値を追跡した」という部分は、第1節にて2商品の等置関係から第3のものとしての「抽象的人間労働」を抽出し、それを価値と規定したところに対応する。第1節では、2商品それぞれの有用性を剥ぎ取った無差別な人間労働としての「抽象的人間労働」を導出し、その量の計測単位として、「社会的必要労働時間」を設定した。この第3節では、そこまでの考察を前提に、スタート地点であった2商品の交換関係を捉え直すことが試みられるわけである<sup>3)</sup>。

ただ、もし引用部冒頭の「商品の価値対象性」が、そうした第1節以来の価値概念とぴったり重なるのなら、そういう既知の概念について「どうにもつかまえようのわからない」とか「相変わらずつかまえようがない」と今更不思議がるのはなぜなのか、改めて考えてみるとやや不自然なところがある。価値が「抽象的人間労働」で、「社会的必要労働時間」によって測られるのであれば、ある商品は例えば10時間の労働生産物であると言明すれば済む話で、なんら「つかまえようがない」ものではないはずである。それでも価値形態論の前でそうした問題提起がなされているのは、第1節および第2節で「現象形態」から掘り下げて追究した価値そのものの概念を、その「現象形態」ともう一度関連づけようとする、単に第1, 2節で辿った道を後戻りすればよいわけではなかったからであろう。商品の価値は社会的必要労働10時間というように表示されることは現実にはないのであって、価格となって現れる。そうである以上、価値をどんなやり方で労働時間に換算してみたところで、価値と価格の関係は見てこない。「商品の価値対象性」という耳慣れぬ用語がここで持ち出されることの意味を敢えて質せば、労働実体という本質の現象面に立ち返るといって単純な本質-現象論に還元できない、商品価値を把握するための独自の方法を探ろうとする問題意識を汲み出すこともできよう<sup>4)</sup>。

上の引用文にすぐ続いて、価値形態論の目的が以下のように掲げられる。

諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態——貨幣形態をもっているということだけは、誰でも、他のことは何も知っていなくても、よく知っていることである。しかし、今ここでなされなければならないことは、ブルジョワ経済学によってただ試みられたことすらないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。(Marx [1962] S.62)

ここの最後の一文を取って、価値形態論の課題を商品の交換関係の中から貨幣が必然的に生まれ出てくることを論証するところに見ることはできる。実際、宇野による商品所有者の欲望の導入は、商品所有者間での交換要求が、結果として特定の商品に直接的交換可能性を付与し、それが貨幣として定立されていくロジックを追う、いわば貨幣選定論として、4つの価値形態を因果論的に順次展開していく価値形態論の方法を提供した。こうして自立した貨幣による「繰り返しの購買」を通じた不断の価格変動が、独自にマルクス価値論に埋め込まれることになったのは、既に「はじめに」にて振り返ったところである。しかし他方で、マルクス価値形態論が、商品の交換関係のうちから貨幣がいかに選び出されてくるかを考察する領域だと特徴づけられた途端、そういう貨幣論ならばマルクスの専売特許ではないし、現代の不換制への説明力にも乏しいという非難が噴出することになる。そうしたアンチ・マルクス派の言説はしばしば、価値形態論の展開を単なる2財の物々交換の世界に矮小化してしまっているが、それに対する釈明ばかりではなく、そのような誤解が繰り返されないよう、問題を立て直すことはもっと真剣に考えられてよい。

そこで課題設定のところをいま一度見直してみよう。「貨幣の謎」というが、そもそもこれは何を指しているのか。貨幣がどうやって選出されるかという以前に、ここで言われている貨幣とは何なのか。こうした疑問には、引用箇所は答えてくれない。貨幣論が極めて多様な観点で論じられているがゆえ、皆バラバラの貨幣概念を思い浮かべながら、ここでの主題を論評するということになる。とすれば、価値形態論の課題は、その最終的なターゲットより、そこに至るまでのアプローチに即して特徴づけられた方が、よりクリアになるのではないか。こうして改めて引用部を読み返してみると、ここでは「貨幣形態の生成 Genesis dieser Geldform」と「貨幣の謎 Geldrätsel」は区別されていると読むこともできる<sup>5)</sup>。「貨幣の謎」は、「貨幣形態の生成を示す」にあたって「同時に」消え去るもの、敢えて違いを強調すれば、序でに解明されてしまう副産物で、本題は「貨幣形態」の方にある、とも読める。とすると、「貨幣形態」は、価値形態論の結論部に過ぎない。その全体が何を追究するものであるかと言えば、「諸商品の価値関係に含まれている価値表現」ということになる。価値形態論は、「価値対象性」として再設定された価値の「つかまえようのない」性質が、いかにして「誰でも、他のことは何も

知っていなくても、よく知っている」ような表現を得ることになるのか、という一種の知覚問題を考察する領域だということになるわけである。このことは直ちに、4つの価値形態同士のヨコの連関を探ることを無意味とするものではない。しかし、4つの価値形態が、それぞれ価値をいかに表現し得ているのか、その方法としての特徴を考察することがまずは追究されなければならない。このとき、マルクス価値形態論は、貨幣選定論とひとまず区別される、価値表現論として位置づけられるのである。

それでは、価値表現とは何か、この問題を考える手がかりとして、『資本論』の価値形態論のテキスト本文を批判的に読解する作業に入っていくことにしよう。

## 2 質量二分法の隘路

### 2.1 『資本論』での展開

マルクスは「最も単純な価値関係は、明らかに、なんであろうとただ1つの異種の商品に対するある1つの商品の価値関係である。それゆえ、2つの商品の価値関係は、1商品のための最も単純な価値表現を与える」(Marx [1962] S.62)と述べて、次の価値表現を検討対象として据える。

「20エレのリンネル = 1着の上衣、または20エレのリンネルは1着の上衣に値する」

この「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」を、『資本論』はまず次のように分析する。

ここでは2つの異種の商品AとB、我々の例ではリンネルと上衣は、明らかに2つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上衣で表しており、上衣はこの価値表現の材料として役立っている。第1の商品は能動的な、第2の商品は受動的な役割を演じている。第1の商品の価値は相対的価値として表される。言い換えれば、その商品は相対的価値形態にある。第2の商品は等価物として機能している。言い換えれば、その商品は等価形態にある。(Marx [1962] S.63)

ここではまず、価値表現に含まれる2商品の違いが、価値を表現される側と表現する側という、立場の違いとして強調される。マルクスはこの価値表現でのリンネルと上衣の立場を、それぞれ「相対的価値形態」と「等価形態」と呼び分ける。これらは教科書的にも定着したマルクス経済学のテクニカル・タームだが、それを確認するだけではこれ以上議論は進まない。これらマルクスの用語に安住することなく、価値表現がどのようになされるのかということ在地頭で考えていこうとすれば、なるべく日常的な用語を使っていくしかない。するとこの引用部で手がかりになるのは、その前の「リンネルは自分の価値を上衣で表す」という、何気ない一

文である。『資本論』の価値形態論では、以下この上衣が何物なのかということが、多種多様な比喻とともに説明されていくことになる。いまそうした後段の議論を全て措いて、「20エレのリンネルは1着の上衣に値する」という一表現に対する解説として、この文章を虚心坦懐に読みたい。

そこで「上衣でim Rock 表す」というのはどういうことなのか、改めて問おうとすると、意想外に複雑な世界が広がっている。試みに、いまこれを、「上衣の中に表す」と訳すことにしてみよう。「リンネルは自分の価値を上衣の中に表す」。価値表現がこのように解説されるとき、そこには等価形態の商品の内部に、相対的価値形態の商品と同量の価値があるからこそ、等置表現も成り立つという含意が込められていよう。リンネルは上衣の使用価値の内側に、自分と等しい量の価値を見抜いたからこそ、上衣を「価値表現の材料」として等置しうるのだ、といった説明である。これは、リンネルと上衣は、使用価値として見た目が異なっている、価値という本質は同じという、本質－現象論とも相通じあう。

しかし前節で見てきたように、価値と価格の関係を問い直す必要性は、この本質－現象論に価値形態論の課題を還元できないところにも求めうる。商品に内在する価値が、価格として表されるという価値表現の構造は、現象としての交換関係から本質たる価値を導く、というプロセスを単純にひっくり返し、本質たる価値が現象したのが価値形態である、と言えば済むだけの問題ではない。それでは、なぜ価値は労働時間ではなく、他の商品で表現されねばならないのか、その必然性が明らかにならない。もしこのような立場に立つとすれば、等価形態の商品の中に自分と等しい価値を見出した結果として、相対的価値形態の商品の価値表現がなされる、という説明では、どこか不十分な点が残るに違いない。別の読み方を模索してみる余地があろう。

先ほどは „in“ の原義に則って、「の中に」と再訳してみたが、「価値表現の材料」と言われるようなその手段性を意識した別解を考えてみたい。例えばこういう訳はどうだろうか。「リンネルは自分の価値を上衣の量で表す」。「in」には、「ドルで支払う」「円で受け取る」といったときに使われる、単位を示す前置詞としての用法がある。こう読めば、「上衣で表す」ということの意味として、「1着の上衣」が20エレのリンネルの等価物になっているというだけでなく、「1 Rock」という表現手段において、上衣 Rock という存在がどういう役割を果たしているのか、ということにまで説明の範囲が及ぶ。すなわち、上衣はここにおいて、価値を量的に表現するための数の単位となっているのである。

このように、等価形態の量的規定性を明示すると、等置表現がなされる場合に、等量の価値が前提とされると推量するのは道理に合わなくなる。価値はそれ自身で、等しいかどうか分かるものではない。否、そうした量的な議論自体が、補語抜きにはできない対象なのである。ある商品の価値がいかほどか言い表すためには、一定の使用価値を持った他の商品を持ち出し、その商品の量で表すより外ない。そうして初めて、価値の量を議論することができるのであって、その背後に本質的に等量な価値が別個に存在するわけではない。価値論あるいは価値形態論は、その意味で本質－現象論の二元論的構成に馴染まず、性質上、量と不可分な表現論的一元論として展開されるしかないということになるのである<sup>6)</sup>。

為念であるが、ここの訳文を「上衣の中に」あるいは「上衣の量で」と訂正すべきと言いたいわけではない。「リンネルは自分の価値を上衣で表す」という訳文は、誤訳でもなんでもない。しかしこの文章には解釈の幅があり、そこに敢えて踏み込んでみれば、文章表現としても幾つかの選択肢がありえ、その解釈の幅は、価値形態論の問題構成の受け止め方の違いと共鳴している、ということがここで言いたいことである。

ただし『資本論』のテキスト自体は、これに続いて、本質－現象論的な二元論の構成を引き継ぎながら、価値形態を考察していくスタイルを見せている。すなわち、現象たる価値形態を、更に質と量の二側面に切り分け、その質的側面こそが価値形態論の本体であると同定し、議論を進めていくのである。次の節に入ると、「1商品の単純な価値表現が2つの商品の価値関係のうちどのようひそんでいるかを見つけ出すためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面から全く離れて考察しなければならない」(Marx [1962] S.64)と述べられ、量関係は切り落とされる。そのロジックは、次のようなものである。

20エレのリンネル = 1着の上衣であろうと、=20着の上衣であろうと、または =  $x$ 着の上衣であろうと、すなわち、一定量のリンネルがたくさんの上衣に値しようと、わずかな上衣に値しようと、このような割合は、どれでも常に、価値量としてはリンネルも上衣も同じ統一体の諸表現であり、同じ性質の諸物であるということを含んでいる。リンネル = 上衣というのが等式の基礎である。(Marx [1962] S.64)

リンネルの価値表現が上衣によってなされるとき、上衣の量は様々でありうる。そうした様々な比率に共通しているのは、リンネルと上衣は、それが価値を有する限りにおいて「同じ統一体の諸表現」であることだと述べられる。この手法は、第1節で行われた、2商品の等置関係から「抽象的人間労働」を抽出する手続きと同一である。そのような実体がリンネルや上衣といった別々の皮を被っていることを「諸表現」と呼ぶのは、「20エレのリンネルは1着の上衣に値する」という文章を価値表現と呼ぶ場合と意味が異なる。しかしここではその違いは脇に置かれ、リンネルと上衣が「同じ統一体の諸表現」であることを根拠に、「リンネル = 上衣」が価値形態の基礎として取り出される。

こうして切り取られた価値形態の「質的な」基礎を『資本論』は次のように分析する。

しかし、質的に等置された2つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。ただリンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？リンネルが自分の「等価物」または自分と「交換されうるもの」としての上衣に対して持つ関係によって、である。この関係の中では、上衣は、価値の実存形態として、価値物として、認められる。なぜならば、ただこのような価値物としてのみ、上衣はリンネルと同じだからである。他面では、リンネルそれ自身の価値存在が現れてくる。すなわち独立な表現を与えられる。なぜならば、ただ価値としてのみリンネルは等価物または自分と交換されうるものとしての上衣に関係することができるからである。(Marx [1962] S.64)



「リンネル＝上衣」という、量が捨象された形になっても、その両辺の非対称性が失われるわけではない。そこでも、やはり上衣ではなく、リンネルの価値だけが表現されるのである。そのことは、価値表現における上衣とリンネルの価値のあり方に即しても、説明されている。上衣は「価値の実存形態 Existenzform von Wert」あるいは「価値物 Wertding」と認められるのに対して、リンネルの価値は「価値存在 Wertsein」として、「価値物」である上衣にいわば従属する形で現れてくるとされるのである。すなわち上衣は、リンネルとの関係の中では、それ自身として実存する価値となる。英語で言えば“The coat exists as value.”と言えるような、価値のあり方をしているのである。それに対して、リンネルは“The linen is worth the coat.”とでもいうような、補語を伴って初めて価値があると言える立場にある。リンネルも上衣も商品として価値を持つという意味では同じだが、価値形態の内部において、そのあり方が異なっているというわけである<sup>7)</sup>。

「実存」や「存在」をめぐる哲学論争に、ここから更に踏み込んでいくことは避けたい。そうしたますます混迷を極めるエリアに突入していくのではなく、先行研究を踏まえよう。ここでは、そうした形態内部での価値のあり方における、微妙な差異を託された「価値物」という概念が、その後の価値形態論における論争のすれ違いを引き起こしたことを確認し、価値形態の考察における、質と量とを二分する思考法の限界を示したい。

## 2.2 宇野一久留間論争再訪

争点となったのは、先の引用の次ページにある以下の文章である。

たとえば上衣が価値物としてリンネルに等置されることによって、上衣に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、確かに、上衣をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうち現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、それを裁縫から区別する特徴を持ってはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われているのである。(Marx [1962] S.65)

この主旨は、等置関係にある2商品が、等置される以前から、それぞれ別々に「抽象的人間労働」によって作られているわけではなく、等置を介して「抽象的人間労働」へと「還元」されるのであり、こうした「回り道」を価値形態が媒介している、ということであろう。この等置による抽象的人間労働への還元は、価値法則の論証という、生産論や生産価格論にまで及ぶ広大な領野へとつながっているが、今はそちらのルートは措く。というのは、この「回り道」は、等置されている2商品の背後の労働にどのような処理が加えられるかという還元問題とはひとまず別個に、それら2つの商品が等置される際の、2商品間の順序とも関わっているからであり、そちらが戦後日本最大の価値形態論争の本体だからである<sup>8)</sup>。

この順序問題を、宇野は商品所有者の欲望を介在させて理解すべきことを説いた。すなわち価値

表現においては、表現される側の商品、つまりリンネルの量が先に決まるのではなく、リンネル所有者の上衣に対する欲望に従って、等価形態の側にある商品の量から決定されるというのである。「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という価値表現がなされるのは、リンネル所有者が1着の上衣を求めているという欲望がまず原動力となっており、その1着の上衣との交換に、リンネルをどのくらい抛出するかを勘案した結果である。例えば重さを測る場合であれば、測られる側のモノの量が決定していないというのにはあり得ないのに、価値表現の場合は、測る側のモノの量が先に決まるのであり、これは所有者の欲望が価値形態を成り立たせるがためである。これこそ価値表現の「回り道」であるが、これは簡単な価値形態のみでは「廻り切れないもの」（宇野 [1952] 473頁）であり、だからこそ価値形態の更なる発展が説かれる必要がある。そうした価値形態論の発展の契機として、商品所有者の欲望が簡単な価値形態の次元から明示的に実装されなければならない。以上が、宇野の『資本論』批判と再構成の指針であった<sup>9)</sup>。

それに対する反論を展開したのが、久留間鮫造である。久留間は、宇野が以上のように商品所有者の欲望を導入して価値形態論を組み替えようとするのは、この「回り道」の内容についての認識不足が災いしているからだを見た。「リンネル自身が、自分を上衣に等しいものにしなければならないが、それが行われるとリンネル所有者自身は、自己の要求する一定量の上衣に対して、リンネルの幾何を提供するかという問題に入ってくる」（宇野 [1947] 130, 131頁）と述べる宇野に対して、久留間は「リンネルはまず自分を上衣に等置しているのではなくて、上衣を自分に等置することによって上衣を価値物にしている」と指摘し、どちらをどちらに等置するかが、「回り道」に示される順序問題として最も重要であるにもかかわらず、宇野がその点を軽視して不用意に「リンネル自身が、自分を上衣に等しいものに」するとしたところを、「それでは単なる独りよがりになってしまう」と批判した（久留間 [1957] 56-62頁）。もしリンネルが、自分で自分を上衣に等価であるとアピールできるなら、リンネルは上衣との等置関係に入る前から「価値物」になれることになり、自らの価値を示すのに他の商品に頼る必要はなくなる。商品所有者の欲望を捨象しないと、このように「回り道」の理解に際し見落としが避けられない。むしろ、リンネル所有者の欲望の対象物として上衣を設定すると、上衣の使用価値が前景化してしまい、上衣がリンネルに対して「価値物」として対峙しており、使用価値とははっきり区別された、等価な2商品の関係そのもののうちに、対称的ではあり得ない対立的な性格が備わるといふ、価値形態の根本問題が看過されてしまう、というのである<sup>10)</sup>。

この論争は、まず『資本論』の読み取りで言えば、明らかに久留間の方に軍配が上がるはずであった。先に引用した『資本論』のテキストにおいても、「上衣が価値物としてリンネルに等置される」と書かれているのであって、「リンネルが上衣に等置される」とは言われていない。それにもかかわらず、宇野が「回り道」に示される価値表現の非対称性を、商品所有者の欲望に即して再構成すべきことを説き続けたのは、「価値物」概念が『資本論』のテキストから先へほとんど分析されず、上衣が先に「価値物」になるという形で順序問題が立てられることの重要性が伝わらなかったためだと思われる。「価値物」は、価値という本質を備えたモノ、すなわち商品一般の意味にも取れる<sup>11)</sup>。このタームがその程度の意味に理解されると、リンネルと上衣のどちらが先に「価

価値物」になるかという形で、「価値物」をめぐる順序問題を言い立てるのは、『資本論』の字句にとらわれすぎた空論に聞こえたことであろう。いくら上衣がリンネルに論理上先立って「価値物」になることを説いたとしても、その直後に等置を通じてリンネルも「価値物」になるのであれば、結果としては2商品の等置関係から非対称性は消え去ってしまい、両辺入れ替え可能な交換関係を認めても構わないことになる。こうした平板で対称的な物々交換に帰着する危険こそ、宇野およびその流れを汲む論者たちが、市場の理論を組み立てる上で最も警戒したものであり、商品所有者の欲望の導入はそれを回避するための強手と考えられてきたのである。

宇野の『資本論』批判に、価値表現論の立場から応ずるためには、したがって「価値物」の概念を、等価形態におかれる商品のみにも適用される、固有の概念として『資本論』から自力で再構成し、表現する側／される側との間の非対称性を価値形態そのものにより深く刻み込んでいく必要があった<sup>12)</sup>。そして、そのような「価値物」概念を用いて価値形態論を理解することで、宇野が描き出した不確定な市場の動態を、宇野よりも有効に解明できることを示さなければならなかった。しかしそのためには、価値形態に質と量の二側面を見出し、そこで両者を切離す発想はむしろ障碍になる。「リンネル＝上衣」という価値形態の「質」において、リンネルではなく、上衣のみが「価値物」になっているとして、それではリンネルと上衣の間の量的比率はどのように決まるのかと言えば、リンネルと上衣、それぞれに「本質」として備わる価値量にしたがって決定される、としか説明しようがないであろう。そこに、上衣だけが「価値物」になっているという、等置関係の非対称性の最重要ポイントは効いてこない。価値形態論の結論として導出される、貨幣が実在する市場において、商品が「命がけの飛躍」に晒された結果、価格がどのような変動メカニズムを備えるのかということも、現状の「価値物」概念からは何も示唆されず、価格は需給関係に応じて上下に揺れる、という見たままの常識を超えられない<sup>13)</sup>。経済学として、そうした価格現象に分析的に接近していけない方法を、原理に据えるわけにはゆかない。「本質と現象」「質と量」こうした二分法は、価値形態をそれらに分解した後、経済学的に有意義な形で再統合することを不可能にしてしまう。それゆえ宇野と久留間、それぞれのアプローチは、喧嘩別れしたまま、その後は実質的に絡み合うことなく独自に展開されていくことになるのである<sup>14)</sup>。

商品所有者の欲望の導入という宇野の解決方法はいかにも俗っぽいのが、それでは久留間の価値形態論解釈が高尚であったかと言えば、通俗的な質量二分法に多分に依拠したところがなかったか。古典に対する学問的な理解の進展には、一種の通俗化が避けられないのではないか、と思わされる。とすれば、久留間ともまた違ったやり方で、価値表現の構造を考える必要がある。「上衣の中に」リンネルと等しい価値を見抜く本質－現象論的二元論と袂を分かち、「上衣の量で」リンネルの価値を掴み出す表現論的一元論にシフトしていく必要性が、ここに仄見えてくる。そこで本稿では、「リンネル＝上衣」に簡単な価値形態が縮減されてしまうより以前、『資本論』の節立てで言えば「価値表現の両極」のところまで立ち戻ることにはせざるを得ない。それにあたり、宇野のマルクス価値形態論批判が、別の角度で見直される必要がある。次節では、まずそこをテコにして、価値表現論としての価値形態論の再構築に向かう<sup>15)</sup>。

### 3 価値の量的表現の構造

#### 3.1 価値の比較表現

宇野-久留間論争の結末を踏まえ、久留間ではなく敢えて宇野の価値形態論の方から価値表現論としての意義を取り出そうとしてみると、宇野の「回り道」批判には2つの筋がないまぜになっていたことに気づく。1つは商品所有者の欲望に従って、相対的価値形態の商品に先行して等価形態の商品が決定される、という主張である。これは「回り道」の順序問題に直接答えるものであり、等置関係にある2商品間の非対称性を画す上でも重要な論点とされていた。しかし、その背後にもう1つの論点が隠れている。それはすなわち、等価形態の商品の量も、ここで決定されるという点である。確かに、宇野の主張においては、この量の決定も、商品所有者の欲望とは不可分である。だからこそ、宇野は「20エレのリンネル=1/2着の上衣」(Marx [1962] S.68)という『資本論』の例について、1/2着の上衣を欲しがめる者はおらず、等価物の使用価値が全く考慮されていないと酷評したのである<sup>16)</sup>。しかしこの等価物の量の決定問題は、欲望の問題よりもずっと、『資本論』の価値形態論の基本構造に深く関わる。既に見てきたように、『資本論』の価値形態論は、「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という簡単な価値形態を、「リンネル=上衣」という「基礎」へと抽象し「内実」を検討した上で、その「量的規定性」の考察を後段に回すという2ステップで展開されていた。それに対して宇野は、マルクス価値形態論を商品所有者の欲望の設定により再構築するとともに、結果として価値表現に備わる量規定を前面に引き出すことになっている。宇野の価値形態論からは、マルクスに見られた質量二分法は意図せずして解消しているのである。

そこで、宇野の『資本論』批判の内容から、思い切って商品所有者の欲望を取り去り、相対的価値形態の商品の量よりも、等価形態の商品の量の方が先に決まる、というところだけを切り出す。そうした途端、貨幣不要の対称的な等労働量交換の世界に真っ逆さまに転落していくわけではないことは、久留間が宇野との論争中に再三主張していた通りである。そこには、非対称的な価値表現の世界が広がっている。その価値表現のレベルに、宇野のアイデアを貫入し、その世界を構造化して捉える枠組みを作ってみたい。「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という価値形態において、上衣の「1」がリンネルの「20」よりも先に決まるためには、リンネルの価値表現に上衣を用いる、ということが前提される。言い換えれば、リンネルの価値を「上衣の量で」表現するには、上衣がリンネルの価値の単位になっている必要がある。数の単位を設定した後、続いて上衣の個数が決定され、最終的に「1着の上衣」が等価物として置かれるのである<sup>17)</sup>。

上衣が価値の単位であるなら、『資本論』にいわゆる、量規定を削除した「リンネル=上衣」が、量を捨象した「質的」な価値表現なるものではなく、そもそも価値表現ではあり得ないことも明確になる。我々が実際目にする価値の単位は、誰でも知っているように、「ドル」や「円」といった貨幣名である。この日常体験からすれば、「リンネル=上衣」の意味するところ、すなわち「リンネルは上衣に値する」が価値表現でないのは、「リンネルはドルに値する」が価値表現でないのと同じである。「リンネル20エレは3ドルに値する」なら、立派な価値表現になる。しかしそこから量を取り去ってしまうと、コロケーションの成り立っていない意味不明の文章になる。したがって

「リンネル＝上衣」は、等式の基礎などではない。価値表現は、必ず量的表現を伴う<sup>18)</sup>。

ただし、これだけなら、「リンネルは自分の価値を上衣で表す」というマルクスの解説を、「上衣の量で表す」と読み替えた前節の議論からでも引き出しうる結論であり、わざわざ宇野価値形態論を経由する必要は実はない。しかし宇野が提起した、価値形態における等価物の量的決定の先行性は、もう一步踏み込んだ価値表現に対する考察への足がかりとなる。単に「リンネルは自分の価値を上衣の量で表す」と説明するだけでは、20エレというリンネルの量までかかり先決しており、その価値を表現するのに上衣を単位として選定してきた、というストーリーも成り立つ。しかし宇野の場合、どんな商品の価値を表現するのかということは決まっていますが、その量は後回しになる。1着の上衣でリンネルの価値を表現する、ということだけが先に決定され、いわば「幾許のリンネルならば、1着の上衣に値するのか？」といった、疑問形の価値表現が途中プロセスには想定されうることになるのである<sup>19)</sup>。

とすれば、価値の量的表現がいかになされるかを分析していくためには、疑問文だった価値表現が、いかにして2商品のレートを断言する平叙文に固まるのか、考えてみる必要がある。1着の上衣に対して拠出されるリンネル量の決定について、リンネル所有者が自身のリンネルに対して抱く欲望を宇野が決して持ち出さなかったことは、ここで強記されるべきである。リンネル所有者にとってリンネルは、「他人のための使用価値」になりきった商品であり、交換以外に用途のないモノである。この商品像は、あくまでマルクスと宇野で共通である。ということは、1着の上衣に対して供されるリンネルの量は、とりもなおさずリンネルが商品として持つ価値に即して勘案されるより外ないが、それは客観的には決まらない。すなわち1着の上衣と交換しうるリンネルの量は必ず20エレになるわけではなく、個別の変動・分散を免れない。仮に「リンネル20エレ＝1着の上衣」が目に見える唯一のリンネルの価値表現であったとしても、宇野の価値形態論の舞台上には、その背後に可能性としてあり得た、1着の上衣に対する様々なリンネルの量が散らばっている。「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という価値表現は、そうした可能性の領域から表に引き出されてきたものに過ぎないのである。

このときもしリンネルの価値、そしてその表現の構制自体に、「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という表現を成立させるポテンシャルが備わると考えるのであれば、1着の上衣に対して供するに妥当なリンネルの量を判断する仕組みを示す必要がある。その説明は、「リンネル16エレ＝1着の上衣」「リンネル20エレ＝1着の上衣」「リンネル23エレ＝1着の上衣」等々といった個々の表現について、単に適否を判断するというだけでは不十分である。その適否は、「リンネル16エレは1着の上衣に値しない」という否定形ではなく、「リンネル16エレは1着の上衣よりも低価である」という、比較表現ができるということが根拠となって下される。「リンネル16エレは1着の上衣に値しない」というだけでは、より多くのリンネルが必要な場合もあれば、逆もありうる。これでは、個々の価値表現の選択肢は、相互に関連をもたず、バラバラに想到されるのみであり、その中から闇雲に答えを的中させようとするような価値表現のなされ方が想像されてしまう。そうした場当たり的な比率決定を考えていては、価値とその表現との間の規制関係を把握したことになる。比較による適否判断は、これらの表現の修正に方向性をもたらす。もちろん、リンネ

ル16エレは1着の上衣よりも低価と考えられることもあれば、高価だとされることもあろう。その限りで、やはりリンネルの価値が交換比率に与える規制力は、ランダムネスを免れることはできない。それでも、リンネルの量の決定による価値表現が、単純な正誤問題ではなく、量的比較を媒介させることを前面に出せば、複数の可能的な価値表現が互いに影響し合う動的構造を、価値形態論に実装できる途が拓ける。商品価値は、個別に変動・分散するいくつもの価値表現を乱立させた、単なる離散状態ではなく、価値の量的比較表現が幾重にも折り重なった磁場を形成し、そこに一つの等置表現を湧出させるのである<sup>20)</sup>。

このように、2商品の等置関係が成立する前提として、価値の比較表現を取り出そうとするなら、それは単に1着の上衣に対して抛出するリンネル量の調整段階だけではなく、もっと広い基層的な場に見出さう。すなわち、ある商品所有者が1着の上衣を欲しいと思ったとして、それに対してどれほどのリンネルが適当か、という調整に入る以前に、そもそも自らの手許にある総資産は、欲しいモノを手に入れるのに足だけの価値を持っているか、というハードルがある。手持ち資産の中からどれくらいの商品を供するか、という思考は、このハードルを越えた先に生じる。この調整段階以前の次元で、商品所有者の総資産は、等価物となるべき商品を単位とした価値の比較表現を既に与えられている。手持ち資産が全てリンネルで構成されており、その量が50エレだとするなら、そのリンネル所有者はいきなり「リンネル16エレは1着の上衣よりも低価である」かどうかを考え出すのではなく、その前に「リンネル50エレは1着の上衣よりも高価である」という比較を行っているはずである。この時点で、手持ち資産が1着の上衣よりも低い価値しかないと判断した主体は、相対的価値形態に置く商品の量的調整に入ることすらない。それでも、上衣を単位とした価値の比較はそこで遂行されているのであり、その所有者の手許の総資産について、価値はひとまず表現されたと言ってよい。これは他者に向かって言明されたものではないが、自らの資産の価値に関する履歴として残り、その所有者自身のその後の行動に影響する<sup>21)</sup>。

かくして、相対的価値形態におかれる商品の量に可変性を認める場合には、価値の等置表現の基礎として、価値の比較表現を理論の俎上に乗せることができるようになる。宇野流の「回り道」の回り方には、このように簡単な価値形態の基礎を、量が捨象されナンセンスとなった「質」ではなく、有意味な表現様式に求める方途が秘められていたのである。商品は自らの価値を自分で表現することはできず、他種の商品を必ず要することは、繰り返し強調されてきた。しかし他の商品でなければ価値を表現できないからといって、直ちにその商品と等しいと置かなければならないわけではない。商品は今すぐに交換が実現されなくても商品でなくなるわけではないし、そもそも商品自身は商品でなくなったところで苦しまない。それゆえ、商品に価値が内在していることは、商品が他の商品とイコールの形式で価値を表現しなければならない理由にはならない。価値の内在性から言えるのは、価値を表現するには他の商品が必要であることまでであり、それは比較表現だったとしても、価値表現として意味の通る文章を作ることはできる。だからこそ、価値の比較表現は、商品所有者の手持ちの全商品に及ぶ。この相対的価値形態に出てこない、背後の手持ち資産は、これまで簡単な価値形態で存在しているとしても、価値表現の対象外とされてきた。それは、価値表現を等置表現とみる限りでは正しいが、資産の存在を「交換を求める形態」の成立を支えるバッファ

の役割に一面化してしまう。もちろん、手持ちの資産が20エレのリンネルに限られないからこそ、相対的価値形態の量的調整が可能になることには留意すべきだが、それは総資産の価値が1着の上衣という欲望の対象物を手に入れるのに十分であることが前提となる。その限りで、価値の比較表現は全ての価値形態の基礎であり、それによって簡単な価値形態においても既に、ひとまずは交換に供されない手持ち資産全体にまで、価値表現を迫る市場への浸透圧がかかっていることが明確になるのである<sup>22)</sup>。

### 3.2 交換と評価：等置表現の成立

しかし、価値の比較表現では交換は絶対に実現しない。すなわち、上衣を1着欲しいという抜き差しならぬ欲望をリンネル所有者が満たすためには、商品の価値表現は比較表現では済まない。そこから進んで、手持ちのリンネルから上衣1着との交換に差し出す分量を確定し、等置表現をなす必要がある。ここで、相対的価値形態に置くリンネル量の調整過程が作動し、最終的に「リンネル20エレ→1着の上衣」という「交換を求める形態」によって、「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という等置表現が結果としてなされることになる<sup>23)</sup>。かくして「交換を求める形態」は、価値の比較表現を量的に固定する。宇野は商品所有者の欲望を、その価値表現がなされる理由の説明に不可欠としていた。それは価値形態の発展を跡付ける動力を前面に押し出す理論的進展を伴ったが、それだけを一面的に強調するのは、価値表現そのものの解明方法としてやはり適当とは言えない。価値表現自体は、商品に向けられる具体的な欲望を充足するという目的と直接結びついていなかったとしても、商品が「他人のための使用価値」であり、価値がある限りなされる。上述したように、1着の上衣に対して拠出される部分だけでなく、リンネル所有者が持っている全ての資産は、既に価値表現の場に引き出されているのである。これは、量的表現によってはじめて価値の存在を主張できる以上、「価値がある」ということは、価値の表現と切り離せないという、価値についての表現論的一元論の発想と符合している。しかし、このときの価値表現とは、等置表現である必然性がない。量を用いた価値表現は、等置表現だけでなく、広く比較表現として成り立つからである。商品所有者の欲望が直接説明しているのは、価値表現が成立する理由ではなく、価値表現が等置表現になる理由なのである。

他方、リンネル50エレのうち20エレが上衣1着との交換要求に供されているとき、残りの手持ちのリンネル30エレの価値は他者に向けて表明されることにはならない。この残りのリンネル30エレが交換に出されないのは、自ら消費するためではなく、とりもなおさず今は1着の上衣しか必要なく、1着の上衣を手に入れるのには20エレより多くを出す必要はないとリンネル所有者が判断したからである。30エレのリンネルは、価値を有するにもかかわらず、それは対外的には表現されずに、潜在的なままに止まっているのであり、そのままでは傍から見ても、それが「他人のための使用価値」として持たれているのかどうかすら、不明であろう。しかしだからといって、その30エレのリンネルが、表に出ている20エレのリンネルとは全く関係を絶たれ、死蔵されていると考えるのは、それらのリンネルが「50エレ」として合算しうる同種性を備えたひとまとまりの商品集積であることと平仄が合わない。「交換を求める形態」の結果としてであれ、少なくとも20エレ分について

てはリンネルの価値表現が陽表的になされた以上は、それが同種商品である他のリンネル在庫にも何らかの影響を及ぼすと考える方が自然である<sup>24)</sup>。

そう考えてみると、逆になぜリンネル所有者が、残りのリンネル30エレの価値を他者に知覚できるよう、発信しないのかということこそ、むしろ説明されなければならないことに思い至る。たとえ50エレ全体に相当する、「2.5着の上衣」はその使用価値を考慮しないものだということを認めたとしても、上衣もまた、リンネルと同じように価値ある商品であるなら、自らの資産構成を一部、リンネルから上衣に組み替えてもよいことになるはずである。つまり、リンネル所有者の現下の欲望は、1着の上衣に向けられたものであるとしても、リンネルは自らの消費対象に全くならないと考える以上は、さしあたり不要であったとしても、自らが今必要している分量よりも多くの上衣と交換を求める行為が排除されはしないはずなのである。その下では、例えば、1着は自らの消費分、もう1着はリンネルに代わる「他人のための使用価値」として、「リンネル40エレは2着の上衣に値する」というような価値表現がありうることになる。それはなぜなされ得ないのか、考えてみる必要がある。

こうした混合された動機による価値表現が妨げられるとすれば、「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という価値表現自体が、「交換を求める形態」の結果的産物としてなされるがゆえに、価値表現として十全でない場合があるということが考えられる。リンネル所有者が1着の上衣にどれだけの量のリンネルを提供するかは、他のリンネル所有者の種々の価値表現を見回しながら、そのうちに決定される。他のリンネル所有者が上衣との交換を求めているとは限らず、他のリンネルの価値表現は直接的には上衣との交換比率の決定に役に立たないかもしれない。しかし、たまたまもし隣に自分が持っているものと同種のリンネルで以って、自分が欲するものと同種の上衣との交換を試みる競争相手がいる場合、1着の上衣を確実に手に入れるためには、その相手よりも多くのリンネルを抛出する必要が出てこよう。そこまで不運な状況でなくても、1着の上衣への差し迫った欲望が、適当と思われるよりも少々多めの量のリンネルを供するよう、リンネル所有者に迫るといったことは十分考えられる。1着の上衣に対してリンネル20エレ、という比率が、こうしたリンネル所有者にとって不利な配慮を多かれ少なかれ重ねた上で決定されるとすると、リンネル所有者は、そうした比率を残りのリンネル30エレに対して適用することは避けたいはずである。ひとまず上衣を1着手に入れた後の残余の資産は、将来のより有利な交換のためにセーブしておくべきであり、それがさしあたって表に出ている20エレ分のリンネルにしか、上衣との交換比率を適用しない理由になる。

そういういわば不服さを含んだ等置表現として「リンネル20エレは1着の上衣に値する」と言われている裏側では、残りの資産である30エレのリンネルについて、改めて比較表現がなされることになる。そのような等置表現がなされる以前には、総資産であるリンネル50エレをひとまとまりとして、「リンネル50エレは1着の上衣よりも高価である」としか言われていなかった。今、リンネルと上衣について20:1の交換比率を表明し、しかしそれはリンネルの価値をやや過小評価しているということになれば、「リンネル30エレは1.5着の上衣よりも高価である」ことが、リンネル所有者の心の内では考えられていることになる。「交換を求める形態」によって表明される交換比率が、



相対的価値形態に置かれた商品にしか適用されない場合にあってもなお、それは残余の資産の価値表現のあり方に影響を与え、価値の量的比較の記録を更改させるのである。こうした価値の量的比較表現は、総資産全体についての比較表現と同じく、やはり対外的に表されることはない。それでも、次なる調整過程の参考材料として、積み重ねられていくのである。

してみると、逆に言えば、もし「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という表現における、20:1という交換比率が、そのリンネル所有者にとって最適と考えられる場合には、この比率を手持ちのリンネル全てに適用したいと思うはずである。この交換比率の最適性は、リンネル所有者が散発的にしか上衣との交換を求めているようなときには判定できない。相当数のリンネル所有者が、恒常的に上衣でその価値を表現している状況が与えられれば、そこに適正とされる一定の相場が観察できることになろう。このようなシチュエーションは、上衣が一般的等価物になればはっきりと現れてくるが、2商品間の関係として簡単な価値形態でも想定できないものではない。簡単な価値形態といっても、リンネル所有者が上衣を欲する蓋然性は区々であり、それは全く個別の場合もあれば、偶然そこに一定のルーチンが成立している場合もありうる。しかしその舞台設定の相違は、価値形態の成立様式に効いてくるのである。

いずれの場合にせよ、リンネル所有者が1着の上衣を欲する以上は、「交換を求める形態」の裏面として「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という等置表現がなされることには変わりがない。しかしそこに示される交換比率が、周りの状況に照らして、リンネルの価値を相応に表すものと考えられるときには、残りのリンネル30エレ全てについて、その比率で価値をひとまず確定しておきたいという追加的な動機が発生する余地が生まれる。とりわけその相場が、将来リンネル所有者に不利な形で崩れる恐れがあるときには、他者からの現行の評価値の認定が要請されよう。こうして、「交換を求める形態」としての「リンネル20エレは1着の上衣に値する」という等置表現に並行する形で、その比率を残りの資産全体に適用した「リンネル30エレは1.5着の上衣に値する」という等置表現が発される。ここに、「リンネル50エレは1着の上衣よりも高価である」という当初の比較表現は、交換と適正な評価を求めてその全体が量的に固定される<sup>25)</sup>。価値の比較表現は、「交換を求める形態」とは相対的に独立に、いわば「評価を求める形態」としても量的比率を一義的に定められ、価値表現として確立するのである<sup>26)</sup>。

「評価を求める形態」は、かくして等価物が有用性を発揮しうる量になるとは限らず、等価形態におかれる商品に直接的交換可能性を付与するものではない。そこでは、表示された比率の認定あるいは保証が求められているだけなので、リンネル所有者は、例えば「リンネル30エレは1.5着の上衣に値する」と明記された証書に、他者からサインをもらうだけでもよい。この証明は、上衣所有者本人によってなされれば最も効果的であろうが、リンネルにも上衣にも利害関係のない第三者によっても無意味というわけではない。上衣を取引するのではなく、リンネルの価値を上衣で評価するプロセスの妥当性が保証されれば十分だからである。そうすることで、今は交換に供されないリンネル30エレ分についても、リンネル所有者はそれらを非売品の家財としてではなく、価値ある商品として所有していることが対外的にも明確に示されることになる。しかし「交換を求める形態」でも物々交換が実際に成立するかどうかの問題でなかったように、「評価を求める形態」につ

いても、そうした取引が現実的かどうかは核心的な問題ではない。それらはいずれにせよ簡単な価値形態であり、貨幣形態の最奥の基礎である。

そしてこのことが意味するのは、市場の基層には、商品所有者が交換と評価という相異なる2つの契機に即して、価値の比較表現を等置表現へと固定化していく二重のダイナミズムが働いているということである。実際、「交換を求める形態」が「評価を求める形態」を引き出すだけでなく、そうして「評価を求める形態」として対外的に交換比率が明示されれば、それはまた他の「交換を求める形態」において供与されるリンネル量の多寡にも影響してこよう。これら2つの価値形態は相互に影響し合いつつ、リンネルの価値表現を形成していくことになるわけである。かくして、商品の交換動機だけでなく、資産としての商品の価値評価を求める動きが、既に簡単な価値形態の次元において商品所有者の行動原理として内在していると考えべきである。そのように価値表現論としての価値形態論の経済学的意義を取り出すことで、単なる商品の売買だけでなく、広く商品経済的富を価値評価に付す場として市場を理論化していく端緒が拓けることになろう。

### Abstract

Value-Form analysis is the most fundamental in the principles of Marxian political economy and Japan has the most fruitful history of studying value-form in the world. Among them, Kozo Uno's achievement was influential since his critique of Marx's value-form analysis gave a clue for capturing the feature of the market in capitalism, but is now losing its momentum due to the lack of an insight into contemporary phenomena such as the fluctuation in asset prices. In order to overcome the deficiency, we shall go back to the text of *Capital* and try to re-criticise it. In addition, we shall look into the most fierce debate on the Marxian political economy in post-WWII Japan, so-called Uno-Kuruma debate, and conclude that it is not appropriate to leave a quantitative aspect of value-form to focus just on its qualitative aspect. Quantity matters, at least in an economic study, as Uno suggested. Though the value-form has been assumed to be an equality, it can be fundamentally described as a comparative expression of value. As soon as one wants something, s/he compares it with the total value of their assets, wondering whether it is enough for getting what s/he wants. The market is not a field of commodity exchange, but of establishing a quantitative relationship, in which these comparatives turn into equations.

Keywords: Marxian Political Economy, Value-Form, Expressing Value, Dichotomy between Quality and Quantity, Market

- 1) 向坂・宇野編 [1958] 127頁では、価値形態論の解説として河上 [1929] の文章が紹介されている。その他、河上 [1932] や櫛田 [1930] 参照。
- 2) これら最近の労働価値説の試みとしては、Foley [1986] 等を嚆矢とする転形問題の「新解釈」や、Heinrich [2004] 等の「新しいマルクスの読み方」アプローチがある。
- 3) 伊藤 [1981] 84-91頁では、第1節と第3節をこのように区別した上で、第1節では「商品交換の困難」の認識が不十分であり、第3節における価値形態の分析の見地から振り返ってみれば「古典派的残滓」を残すものとされる。価値形態論が古典派に対する『資本論』の独創性を最も

鋭く示すことに異論はないが、それは形態に先行する価値の概念を必要とするはずであり、その点は掘り下げるべき論点をなしていない。

- 4) 小幡 [2013] 25-27頁および [2016] 36, 37頁参照。山口 [1987] 58-60頁もまた、ここの解釈を通じて、抽象的人間労働・価値・価値の現象形態（価格）の3者を区別すべきことを説いているが、このとき価値は、その現象形態に先立って商品に内属するものではないとされる。これは宇野価値形態論の一つの展開方向であるが、以下において価値形態を価値の表現様式としてもう一度読み解こうとするとき、こうした非内属的な価値概念では、十分表現問題の構造を描き切れない。表現様式は、定義上表現される側の何かを前提するからである。
- 5) 久留間 [1957] 4頁や大谷 [1993] 156, 157頁は、「貨幣形態の謎」と「貨幣の謎」を区別している。
- 6) 小幡 [2016] 38頁参照。
- 7) 富塚 [1980] 312, 313頁および小幡 [2013] 33-35頁参照。
- 8) 宇野-久留間価値形態論争は、第二次世界大戦直後に行われた「資本論研究会」において、宇野が価値形態論に商品所有者の欲望を導入する案を提起したことに端を発する。向坂・宇野編 [1958] 157頁参照。このアイデアは宇野 [1947] の中でも敷衍され、それにこの研究会にも出席していた、久留間が応戦したのである。「価値形態論と交換過程論（1）」（『経済志林』第18巻第1号、1950年、久留間 [1957] 所収）がまず発表され、すぐさま「価値形態論の課題」（『経済評論』1950年、宇野 [1952] 所収）における反論がなされた。久留間の第1論文は連作であり、その後「価値形態論と交換過程論（2）（3）」（『経済志林』第18巻第3号、第19巻第1号、1950, 51年、久留間 [1957] 所収）が出され、（3）の方で宇野の反論への応答がなされている。

その後宇野は、自身の価値形態論をベースに、本稿冒頭で触れた価値尺度論の再構築へと向かい、論争は第二ラウンドを迎える。「マルクスの価値尺度論」『矢内原先生還暦記念論文集』上、1958年（宇野 [1959] 所収）は、宇野 [1950, 52] の価値尺度論を、『資本論』批判を通して論じており、それを久留間が研究会にて論評した記録が、「マルクスの価値尺度論（1）-（3）」（『思想』第474号、476号、481号、1963, 64年、久留間 [1979] 所収）として発表されている。久留間 [1979] では、宇野 [1959] の価値尺度論は価格の量的決定のみにとらわれ、貨幣は私的労働が社会的労働になる一モメントとして、まずは質的に価値尺度となっていることが軽視されている、という批判がなされている。それに対する反論は、「マルクスの価値尺度論について」（『思想』483号、1964年、宇野 [1969] 所収）でなされている。価値尺度論での論争の際には、久留間の質量二分法的な理解が、よりはっきりと打ち出されているが、宇野は「貨幣が購買手段として機能するというのもまた重要な「質的規定」である」（宇野 [1969] 336頁）と反駁するばかりで、矛先を質量二分法そのものには向けない。本稿からしてみれば、その限りで宇野の『資本論』批判も不徹底に終わっている。

なお「回り道」の力点を、宇野-久留間論争の争点であった価値表現の問題としてではなく、価値関係の成立と抽象的人間労働への「還元」に見る解釈として、佐々木 [2011] 165-169頁参照。

- 9) 宇野 [1950, 52] 31-35頁、[1962] 191-202頁、[1964] 31, 32頁参照。
- 10) 久留間 [1957] 69-71, 84-100頁、[1979] 114-123頁参照。
- 11) このような解釈に立つ久留間説批判として、松石 [1972] 43頁や武田 [1982] 331頁参照。
- 12) 久留間 [1979] 93-100頁では、上衣だけが「価値物」なのではなく、リンネルと上衣はともに「価値物」であり、等価形態のみに充てられる呼び名としては『資本論』では「価値体 Wertkörper」が使われていると述べられている。大谷 [1993] 171, 172頁や佐々木 [2011] 157-159頁も参照。このとき、価値形態の非対称性は「価値物」と「価値体」の違いに改めて託されることになるが、「価値体」とは何かという問題は依然として残る。なお本稿では、「価値物」と「価値体」の区別を論じることはしない。それはそれら2つの用語は同義だとする富塚 [1980] 318, 319頁の解釈に賛成するからではなく、そもそもそれらが前提としている、量を捨象した「価値形態」を分析対象と

することに疑問を持つからである。

- 13) 久留間 [1979] は、『資本論』の価値尺度論にて需給関係が捨象されている点を批判する宇野の見解について、マルクスは「単なる商品や貨幣を論じる段階では論じえない問題だとして、後の競争論に留保している」(226頁)としている。しかしだからといって、マルクスの競争論が、商品論・貨幣論といった体系の冒頭部分での価値論をどう生かすものであるのか、問わなくてよいことにはならない。この意味では、原理論全体に及ぼす影響まではっきりと見通しがつけられている宇野の冒頭価値論は、経済理論としてより体系的であった。宇野 [1962] 第IV編第2章、宇野 [1969] 356, 357頁参照。
- 14) 久留間は、宇野が「商品の価格表現というのは、ひとりよがりの宣言なんだ」(宇野 [1970, 73] 715頁)と自説を再論するのに対して、「これは価格の高さのこと(言い値のこと)を考えているのだろう。価値形態の本質的な問題とはちがう」(久留間 [1979] 111頁)と述べる。「価値形態の本質的な問題」には、「価格の高さ」つまり量は含まれない、という理解が端的に言い表されている。
- 15) 宇野-久留間論争は、日本の価値形態論の論壇を興隆させた。そのことは、佐藤ほか編 [1977] 等のサーベイ研究からも窺い知ることができる。しかし宇野と久留間、それぞれの方向性では研究の進展が見られたものの、その間の論争は下火になっていく。日本のそのような状況をよそに、近年 Lange [2014] は、輸入学問としてではなく、日本で独自にマルクス価値形態論の意義を発見し展開した重要な研究蓄積として宇野-久留間論争を取り上げている。しかしそこでは、久留間 [1957] において宇野の問題点は完璧に反論し尽くされているとされ、宇野によって無視された「物神としての価値の抽象を再論する」(Lange [2014] p.21) だけに終わっている。
- 16) 宇野 [1959] 53, 54頁、宇野 [1962] 195, 196頁参照。
- 17) 久留間 [1957] 54頁では、「簡単な価値形態において、ある特定の商品が等価形態に置かれているのはなぜかという問題と、等価形態に置かれている商品の使用価値が相対的価値形態に立つ商品の価値を表現しうるのは如何にしてかという問題とは、はっきり区別して考えられうる」とされ、後者の問題こそ「価値形態論において究明すべき最も基本的な問題」と述べられている。本稿は、宇野価値形態論において後者の問題に前者の問題を位置づけ直そうとする試みだが、逆に山口 [1999] は、Deleuze and Guattari [1972] によって欲望概念を資本主義における特殊な実体性に繰り込みつつ、価値表現を商品所有者の欲望の「現象形態」と見て、欲望論に表現論を包摂する試みだと言える。
- 18) 沖 [2012] 103頁では、簡単な価値形態は「20エレのリンネルは1着の上着である」と言っているのである。もちろん、20エレのリンネルは1着の上着ではないのだから、これは不可能な表現である。しかし他方で、価値の現前不可能性は他の商品による表現を必要とする。それゆえ、価値表現は否定されてはまた他の商品による表現を求めるという無際限な試みを続けることになる」と述べられている。こうした価値形態論の組み替えは、価値形態の展開動力を宇野のように商品所有者の欲望に求めるのではなく、価値表現自身に求めることで、欲望を満たすための交換の場として市場を描いてきたこれまでの経済学を超克するという試みの一端ととれる。しかし、「20エレのリンネル=1着の上衣」という簡単な価値形態を、「20エレのリンネルは1着の上着である」という表現と読むことには疑問がある。そこでは、„wert“ (値する) という末尾の形容詞を外してよい理由が述べられていないし、また価値表現の文章がその単語を欠いてもなお分析対象として成立するとは考えられない。ここでは、『資本論』よりも不適切な形で、価値表現たりえない架空の形態が、その基礎として据えられてしまっている。また、他方で「交換行為なき価値表現がありえない以上、両者の区別のみを過度に強調することはできない」(沖 [2012] 58頁) ことを認めながらも、価値表現固有の展開動力をこうしたトロポロジー論に探ろうとする同書のスキームは、後に触れる小幡 [2009] のように、「交換を求める形態」の裏側に結果として価値表現がなされていくと考えているのか、それとも「交換を求める形態」とは別個に価値表現の契

機を求めているのか、はっきりしない。

- 19) 小幡 [2013] 第1章でも、『資本論』の価値形態論の、質と量とを分断した考察方法が批判に付され、「1着の上着に対して20エレが相応なのか、それとも19エレ、あるいは21エレとすべきなのか、＜性質の量化＞こそ価値表現の核心をなす」(39頁)と述べられている。しかし、なぜここで上着の量ではなく、リンネルの量が動かされているのかという順序問題、そしてそれに連なるより広い量的決定問題には立ち入ることなく、価値形態論の検討は幕引きとなってしまふ。『資本論』の質量二分法を棄却するなら、それに代わる「価値表現の核心」とはなにか、示す必要がある。そのために本稿では、価値形態の順序が争点になった宇野-久留間論争に立ち寄った。以下の本文では、その未解決問題に対する、本稿での積極説を提示してみたい。
- 20) 日高 [1994] 60-64頁では、宇野のように等価形態の商品の量が先決し、相対的価値形態の商品量が動かされるなら、後者ではなく、前者の価値表現が行われていると解すべきだと述べられている。この調整過程でなされていることを価値の比較表現として統語論的に捉えれば、これが決して等価形態の商品の価値を表現するものではないことは明らかであろう。「リンネル16エレ=1着の上衣」「リンネル20エレ=1着の上衣」「リンネル23エレ=1着の上衣」等々といった比率をただ並べてみると、まるで1着の上衣にリンネル表示の値札を付け替えているように見える。しかしそこで行われているのは、「リンネル16エレは1着の上衣よりも低価である」というように書き表されるような、価値の比較であり、この文章は紛れもなくリンネルの価値を上衣で表現したものであって、逆ではない。
- 21) 総資産の価値が欲しい商品を手に入れるのに満たない場合、その主体がどう動くかはここでは扱わないが、興味ある論点である。欲しい商品を変更してしまうということも考えられるが、価値形態論における欲望の指向性を前提にするなら、欲しい商品を手に入れるべく、総資産の価値を増やそうという動機が生まれるはずである。ここに、資本への跳躍のモメントが胚胎していると見ることもできよう。尤もこの段階では特定の使用価値が目的となっており、価値増殖が自己目的化しているとは言えず、資本と呼ぶにはあまりにも未熟である。この使用価値的制限が突破されるには、価値のみを表す貨幣の存在が不可欠であり、したがって価値形態論が先行する必要がある。
- 22) 大黒 [2016] 90-92頁は、宇野の「回り道」論に、商品の価値表現が、等価形態の商品に「直接的交換可能性を付与し、逆に自己をそれに受動的に従属させてしまうという主客逆転のロジック」を見出し、それをフーコー的な「権力をめぐる主導権争いのダイナミズムの帰結」と喝破する。この「主客逆転」を、単に「帰結」のみにて押さえるのではなく、その「ダイナミズム」において描き出そうとするなら、「交換を求める形態」の結果としての価値表現のみならず、そのプロセスで進行する動的な表現様式の世界へと踏み込んでいかざるを得ないはずである。そこで全ての商品にかかる市場での圧力は、それらの有する価値に淵源を持つ「権力」と言い換えられようが、その発生条件にはなお原理的に詰めるべき余地がある。
- 23) 小幡 [2009] 35-38頁では、商品所有者の欲望によって引き出される「交換を求める形態」の結果として、商品の価値表現がなされるというように、両者のパラレルな成立が論じられている。これは、「交換を求める形態」に一元化される傾向のあった宇野派の価値形態論に、価値表現論を実装する試みであるが、価値表現は、2商品の等置関係でしかあり得ない「交換を求める形態」よりも、かなり広範な基層領域を覆っているのであり、両者はそのように表裏の関係にはなっていない。
- 24) 宇野 [1964] にも、簡単な価値形態では「20ヤールのリンネルの価値を表示するというのではなく、リンネルの価値を表示するために、この場合はリンネル20ヤールがとられたにすぎない」(31頁)というように、「20ヤールのリンネル」を相対的価値形態に置くことが、リンネルという商品全体に対して何らかの影響をもたらすことへの言及がある。この指摘から、清水 [2008b] は、交換要求の下に差し出されたリンネル20エレと、それ以外のリンネルとを一括した「リンネル集

合」が、交換要求とは別個に「その価値を一斉に表現ないし評価される」と見ている(72,73頁)。その上で、提供できるリンネル量の調整範囲の設定を「価値評価」と呼び、「価値形態は、対外的な価値表現である交換要請と、対内的な価値表現である価値評価との両義性をもつ」としている(77,78頁)。交換と区別された価値の評価問題を取り出そうとしている点で、本稿と軌を一にしているが、相対的価値形態に置かれる商品量の確定と、その量の変動範囲の設定を分けて認識することは難しい。変動範囲を個別商品所有者が自身で指定したとしても、それは周囲の状況次第でいかようにも揺らいでしまうのであり、あまり決定的な理論上の意義を持たないように思われる。むしろ「交換を求める形態」も、この理論次元では不断の更改を免れないが、それは「対外的」になされた以上、不特定多数の他者の判断に影響する。とすれば、「交換要請」と等位に「価値評価」の理論的役割を位置づけようとするなら、それもまた「対外的な価値表現」としてなされるものと考えより外ないのではないか。そのためには、「20ヤールのリンネル」が相対的価値形態に置かれることが「リンネル集合」全体について持つ意味を、改めて問い直す必要がある。

- 25) 清水 [2008a] 7-10頁では、あくまで交換比率としてではあるが、簡単な価値形態から拡大された価値形態への展開にかけて、一定期間にわたる価値比率の確定がなされることが指摘されている。
- 26) このように資産全体が価値表現に付されるときには、リンネル1エレゴとの単価表示になるのであり、それが貨幣形態の特徴とされてきた。しかし貨幣形態であっても、隙あらば現行相場よりも高いレートで価値評価を受けたいという動機は働くはずであり、単価表示をしたからといって、その価格でなら無制限に商品を放出する意思表示をしたことになるかどうかは分からない。むしろ、単価表示は種々の販売戦略を、販売量の調整によって可能にする技術上の手段であって、貨幣形態の成立による必然的帰結とは言えないようにも思える。そのとき、交換とはひとまず切り離された、評価を求める形態として価値表現がなされることを考えると、単価表示と資産全体の価値表現との間にはそこまで大きな懸隔はないことになろう。

### 参考文献

- Deleuze, Gilles and Félix Guattari [1972] *L'anti-Édipe*, 市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社, 1986年。
- Foley, Duncan K. [1986] *Understanding Capital*, Harvard University Press.
- Heinlich, Michael [2004] *Kritik der politischen Ökonomie*, 明石・佐々木・斎藤・隅田訳『『資本論』の新しい読み方』堀之内出版, 2014年。
- Lange, Elena Louisa [2014] "Failed Abstraction — The Problem of Uno Kōzō's Reading of Marx's Theory of the Value Form", *Historical Materialism*, Vol.22, No.1.
- Marx, Karl [1962] *Das Kapital*, Buch I, in *Marx-Engels Werke*, Bd.23, Dietz Verlag.
- 伊藤誠 [1981] 『価値と資本の理論』『伊藤誠著作集』第2巻, 社会評論社, 2011年。
- 宇野弘蔵 [1947] 『価値論』こぶし書房, 1996年。
- 宇野弘蔵 [1950, 52] 『経済原論』合本版, 岩波書店, 1977年。
- 宇野弘蔵 [1952] 『価値論の研究』『宇野弘蔵著作集』第3巻, 岩波書店, 1973年。
- 宇野弘蔵 [1959] 『マルクス経済学原理論の研究』『宇野弘蔵著作集』第4巻, 岩波書店, 1974年。
- 宇野弘蔵 [1962] 『経済学方法論』東京大学出版会。
- 宇野弘蔵 [1964] 『経済原論』岩波文庫, 2016年。
- 宇野弘蔵 [1969] 『マルクス経済学の諸問題』『宇野弘蔵著作集』第4巻, 岩波書店, 1974年。
- 宇野弘蔵 [1970, 73] 『資本論五十年』法政大学出版局。
- 大谷禎之介 [1993] 「価値形態」『経済志林』第61巻第2号。

- 沖公祐 [2012] 『余剰の政治経済学』 日本経済評論社.
- 小幡道昭 [2009] 『経済原論』 東京大学出版会.
- 小幡道昭 [2013] 『価値論批判』 弘文堂.
- 小幡道昭 [2016] 「商品価値の内在性」 『季刊経済理論』 第53巻第2号.
- 河上肇 [1929] 『マルクス主義経済学の基礎理論』 『河上肇著作集』 第8巻, 筑摩書房, 1964年.
- 河上肇 [1932] 『資本論入門』 上, 『河上肇著作集』 第4巻, 筑摩書房, 1965年.
- 櫛田民蔵 [1930] 「金本位の基礎理論について」 『櫛田民蔵全集』 第2巻第12章, 改造社, 1935年.
- 久留間鮫造 [1957] 『価値形態論と交換過程論』 岩波書店.
- 久留間鮫造 [1979] 『貨幣論』 大月書店.
- 向坂逸郎・宇野弘蔵編 [1958] 『資本論研究』 至誠堂.
- 佐々木隆治 [2011] 『マルクスの物象化論』 社会評論社.
- 佐藤金三郎・岡崎栄松・降旗節雄・山口重克編 [1977] 『資本論を学ぶ』 (1), 有斐閣選書.
- 清水真志 [2008a] 「価値の同質性 (2)」 『専修大学社会科学研究所月報』 第542巻.
- 清水真志 [2008b] 「同質性としての価値概念」 『季刊経済理論』 第45巻第3号.
- 大黒弘慈 [2016] 『マルクスと賃金づくりたち』 岩波書店.
- 武田信照 [1982] 『価値形態と貨幣』 梓出版社.
- 富塚良三 [1980] 「価値表現の「回り道」の論理と交換過程の矛盾」 小林・富塚・渡辺ほか編 『資本論の研究』 第2巻, 青木書店.
- 日高普 [1994] 『マルクスの夢の行方』 青土社.
- 松石勝彦 [1972] 『独占資本主義の価格理論』 新評論.
- 山口系一 [1999] 「経済主体にとっての貨幣と信用」 小幡道昭編 『貨幣・信用論の新展開』 第1章, 社会評論社.
- 山口重克 [1987] 『価値論の射程』 東京大学出版会.

(江原) 東京大学大学院経済学研究科助教